

Title	『阪大日本語研究』1号 1989.3 要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1989, 1, p. 129-131
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10595
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語研究のながれ

徳川 宗賢

キーワード：日本語研究史 国語学史 日本語教育

日本語研究史(=国語学史)を展望し、現代的課題である日本語教育と日本語研究がどのようにむすびつくかを考察する。日本語研究は、いつの時代も、現実的課題に直面して、その解決をバネとして発展してきた、というちがいをとる。

関西周辺部における言語接触の一斑

— 語法に関するグロットグラムから —

真田 信治

キーワード：関西方言 言語接触 言語変化 一段動詞の五段活用化 グロットグラム

紀伊半島をフィールドとして実施した方言調査のデータのうち、語法に関する項目をグロットグラム(地点×年層図)の形にまとめ、この地域における言語接触の様相を分析した。

調査地の北部域では、大阪的な語法が関西中央部のプレステージを背景にしだいに侵入しつつあることが明らかとなった。そして、中部域では、関西中央部方言が干渉した結果の、類推によって新しく生じたと考えられる形式がいくつか観察される。なお、この地域では一段動詞の五段活用化が規則的におこっているが、その傾向は年層が低くなるにつれて著しく、若年層では定着する勢いを示している。

述べ立てのモダリティと人称現象

仁田 義雄

キーワード：述べ立て 推し量り 人称制限 述べ立て内容 運用論的現象

本稿は、述べ立て文の有しているモダリティとその文のガ格に立ちうる人称との相関関係のあり方を考察したものである。述べ立て文は、〈述べ

立て>といった発話・伝達のモダリティを有していることによって、例えば、「{僕/*君/彼}は明日彼女を叱るつもりだ。」「{僕/*君}は母が恋しい。」「{*君/彼}は母を恋しがっている。」のように、意志的動作遂行の決意や感情・感覚などといった述べ立て内容を表す場合、通常の対話の文としては、そのガ格に二人称を取りえない。また、述べ立て文は、断定と推量といった判断のモダリティの存在・分化を有している。しかし、総ての述べ立て文が同じように、推量のモダリティを有するわけではない。例えば、「僕は彼を殴った{*だろう/らしい}。」「私は頭が{痛い/*痛いだろう/*痛いらしい}。」のように、ガ格に一人称を取る一人称者の過去の意志的動作や現在の感情・感覚を表す文などでは、推量系の表現形式の現れに制限が存在する。

応答と談話管理システム

森山 卓郎

キーワード：談話 応答 談話標識 聞き手情報配慮理論 言語行動

先行文が聞き手や情報や存在を仮定する場合には応答が必要なスロットになる、というようなことも含めた、先行文の意味と、応答者の談話に対するかかわり方との相関から、談話管理の標識としての応答を考える。未知の情報を受け入れる場合の、一種の演技まで含めた驚きの表示のように、応答の表現にはルールがあり、円滑な談話進行の不可欠の働きをする。形式は、機能的な観点に即して、次のように整理される（ここでは、態度表明システムを中心に考える）。なお、下線部は、肯定的反応の基本性により単なる聞き取り表示が代行できる。

広義 応答	{	展開制御系統 (内容展開制御/関係設定) :	接続詞や呼び掛け等も含む
		態度表明系統	対一策動文 { <u>肯定的</u> / 否定的 }
			(狭義応答) 対一認識文
		情報が未知 { 肯定と否定が連続的 }	

意味研究メモ その1

寺村 秀夫

キーワード：日本語 意味論 「表わすと指す」 表と影 明示と暗示

「意味」とは何かについて、根本的に考える必要がある。文脈を離れても変わらないシニフィエとしての意味（表象）と、文脈内での存在認定や同定としての意味（指示）とを明確に区別し、さらに、「取り立て」助詞のようなものを持つ暗示的な「影」の意味を考える。「影」は「さえ」のような「固有の形式による暗示」と文脈的に「さえ」と重なる「も」のような「環境依存的暗示」とに区別される。

「～のだ」の本質を求めて

—再び山口佳也氏に答えて—

佐治 圭三

キーワード：～のだ ～のだから ～のなら 仮の題目 主題

「～のだ」に関しては、それは広い意味での状況に基づく判断を表す形式であるとする説（私見もそれに属する）と、「の」は一種の体言であって、その前は連体修飾語であり、「～のだ」には常に「～のは」なる題目が存在するとする説（山口佳也説）がある。

「～のだ」が何らかの事態を前提として現れる形式であり、文を名詞文化するものであるという点では、私見も山口説も違いはないのであるが、その前提となる事態を基として述べるのか、その前提となる事態を「～のは」という題目として、それについて述べるのかという点で、私見と山口説は異なり、その違いは「～のだ」の文に表れる「普通の名詞+は」を真の主題と見るか、仮の主題と見るかと言う点に端的に現れる。

「～のだ」の文に常に「～のは」なる主題の存在を想定することには、いろいろな点において無理があると思われる。